

青年期における人格形成と 精神的健康に関する研究 (V)

—— 性役割および自我同一性地位と役割受容・充実感の関連 ——

三 川 俊 樹・井 上 知 子・芳 田 茂 樹*

A Study of Personality Formation and Mental Health in Adolescence (V) :

Gender-role, ego-identity status and their relationship
to role-acceptance and fulfillment feeling.

Toshiki MIKAWA, Tomoko INOUE, & Shigeki YOSHIDA

問 題 と 目 的

この一連の研究では、青年期における人格形成のあり方と精神的健康との関連について検討するために、性役割および自我同一性地位を測定する尺度を開発し（三川ほか、1989）、価値観との関連を検討してきた（三川ほか、1990）。本研究では、精神的健康を表す1つの指標として、役割受容と充実感を取り上げ、これまでと同様の方法を適用して、性役割および自我同一性地位との関連を検討したい。

役割受容とは、三川（1988）が、仕事や学習活動、家庭生活、趣味やレジャー活動などによって規定される役割特徴（role-salience）が、個人にどの程度受容されているかを明らかにするために用いた概念であり、自分の生き方や果たすべき役割に対する認識や肯定的評価を内容とするものである。キャリア発達との関連でみると、役割受容は加齢とともに高まり、ライフ・スタイルが安定するにつれて、役割受容が高くなることが見い出されている（三川、1990）。つまり、青年期のように、人生における主要な役割が未分化な状態では役割受容は低いが、発達に伴ってその個人に適した役割が獲得され、それにつれて役割受容は高まっていくといえる。したがって、人格形成のプロセスとしてみれば、発達に伴って高まる役割受容は、パーソナリティの成熟、あるいは精神的健康の指標とすることができると考えられる。

* 大手前女子短期大学講師・本学文学部非常勤講師

また、充実感についても、精神的健康との関連が論じられてきた。西平 (1973) は、青年期の充実感とは、その青年の健康な自我同一性の実感であることを指摘している。また、大野 (1984) は、青年が健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情を充実感と呼んでいる。このようにみると、従来から取り上げられてきた充実感を、精神的健康の指標としてとらえることは有効であるといえる。

ところで、これまでの研究の中で明らかにしてきた性役割および自我同一性地位について、精神的健康との関連を予め考えておくことにしたい。

まず、性役割については、「男性統合性」「男性典型性」「女性統合性」「女性典型性」の4側面が見い出されている。そして、それぞれの性における「統合性」は、「典型性」よりも成熟したあり方であり、性役割形成のプロセスとしては、未分化な状態から、まず「典型性」が獲得され、その後に「統合性」が獲得されるという発達方向を想定している。したがって、男性では「男性統合性」が獲得されているほど、女性では「女性統合性」が獲得されているほど、パーソナリティは成熟しており、精神的に健康であるという予測ができる。

一方、自我同一性地位については、これまでの研究の結果からみて、「拡散」地位が最も未熟なタイプであるのに対して、「達成」地位は最も成熟した、精神的に健康なあり方であるといえる。また、「モラトリアム」地位は、「拡散」から「達成」に至るプロセスとして位置付けることができる。「早期完了」地位の位置付けは明確でないが、自我同一性地位に関する研究の多くでは、探索あるいは危機を経験した後に傾倒を成し遂げた「達成」地位を最も成熟したタイプであるとするのに対して、探索を経験していない「早期完了」地位は、むしろ否定的に評価されているように思われる。

本研究では、まず「役割受容」および「充実感」を測定する尺度を、これまでに開発されている尺度を短縮して構成することにしたい。その上で、先に開発した性役割尺度および自我同一性地位尺度を基に、これらの関連を検討し、性役割の獲得および自我同一性地位のあり方が、精神的健康の指標としての役割受容および充実感にどのように反映されているかを考察したい。

方 法

(1) 調査票の構成

① 性役割の測定

性役割の測定には、三川ほか (1989) が作成した「性役割尺度」を用いた。「性役割尺度」は、「男性統合性」「男性典型性」「女性統合性」「女性典型性」の4側面について各10項目で構成され、それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを、「非常によくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」までの5段階で自己評定させるものである。また、得点化に

あたっては、「非常によくあてはまる」と回答した方向から、5点～1点を与える。

② 自我同一性地位の測定

自我同一性地位の決定要因としての「探索」および「傾倒」の程度を測定する「自我同一性地位尺度」(三川ほか, 1989)を用いた。この尺度は、職業、価値、学業の3領域における「探索」と「傾倒」の程度をそれぞれ8項目で測定するもので、各項目の記述文がどの程度自分にあてはまるかを、「非常によくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」までの5段階で自己評定させるものである。得点化にあたっては、「探索」および「傾倒」を表す方向から5点～1点を与える。また、自我同一性地位の決定には、各領域ごとに「探索」と「傾倒」の得点を組み合わせて、「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」の4地位に分類することができる。

③ 役割受容の測定

役割受容の測定には、三川(1988)が開発した「役割受容尺度」の短縮版を作成することにした。「役割受容尺度」は、「役割満足」「役割評価」「役割有能感」「役割達成」の4尺度(27項目)から構成されるが、本研究では、因子分析の結果に基づき、各尺度とも因子負荷量の高い5項目を採択した。下位尺度の内容は、「役割満足」が自分の生き方や生活に対する満足感を表し、「役割評価」は自分の生き方や役割に対する肯定的評価を内容とし、「役割有能感」が果たすべき役割を遂行する能力や自信を表し、「役割達成」は自分の役割の積極的な遂行を内容とするものである。得点化にあたっては、各尺度の内容を表す方向から5～1点を与える。なお、項目内容は、〈付表1〉に示した。

④ 充実感の測定

充実感の測定には、大野(1984)が開発した「充実感尺度」の短縮版を作成した。大野によれば、充実感尺度は、充実感の生活気分としての側面を示す「充実感気分—退屈・空虚感」、自立・甘えと自信の内容を含む「自立・自信—甘え・自信のなさ」、連帯意識・孤立意識を示す「連帯—孤立」、社会生活の中での自己の存在を肯定する信頼感と自己の将来に対する開いた時間的展望を示す「信頼(時間的展望)—不信(時間的展望の拡散)」の4因子から構成されるが、本研究では各因子とも因子負荷量の高い5項目を採択して尺度を構成した。得点化にあたっては、各尺度とも肯定的な内容を表す方向から5～1点を与え、それぞれの尺度を、「充実感気分」「自立・自信」「連帯」「信頼」と表現することにした。なお、項目内容は、〈付表2〉に示した。

(2) 調査時期・調査対象

本調査は、1991年4月に追手門学院大学の心理学科学生を対象にして、個人配布で行った。なお、調査票のフェイス・シートには、年齢・学年・性別のほか、縦断的研究の資料とするた

表1 調査対象の構成

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男子	45	15	12	12	84
女子	71	46	34	38	189

めに学籍番号の記入を求めた。完全回答が得られた被検者数は、表1に示した通りである。

結果と考察

（1）役割受容尺度（短縮版）および充実感尺度（短縮版）における信頼性

役割受容尺度および充実感尺度については、各尺度ごとにクロンバックの α 係数を算出し、表2に示した。役割受容尺度の「役割達成」では、 α 係数が.61とやや低かったが、その他の尺度では.70を超える値を示しており、項目数が5項目と少ないことを考慮すれば、ほぼ満足できる信頼性を有しているといえる。

また、本研究では、全体的な役割受容および充実感の指標として、4つの下位尺度の合計得点（総得点）を用いることにした。そこで、役割受容尺度、充実感尺度とも、4つの下位尺度の得点を合計した総得点と、それぞれの下位尺度の得点との相関をピアソンの相関係数によって算出し、表3に示した。その結果、役割受容尺度については、「役割達成」と総得点との相関が.58とやや低かったが、その他の尺度では.80～.88の値を示し、充実感尺度でも.76～.86の相関を示していることからみて、下位尺度の得点を合計した総得点を、全体的な役割受容および充実感の指標とすることに問題はないと考えられた。

表2 役割受容尺度・充実感尺度の信頼性（内的一貫性）

役割受容	α 係数	充実感	α 係数
1. 役割満足	.80	1. 充実感気分	.86
2. 役割評価	.78	2. 自立・自信	.77
3. 役割有能感	.83	3. 連 帯	.79
4. 役割達成	.61	4. 信 頼	.71

表3 役割受容尺度・充実感尺度における下位尺度と総得点の相関(N=160)

役割受容尺度	役割満足	役割評価	役割有能感	役割達成
総得点	.80	.88	.85	.58
充実感尺度	充実感気分	自立・自信	連 帯	信 頼
総得点	.86	.77	.76	.77

(2) 役割受容および充実感の性差

役割受容尺度および充実感尺度について、4つの下位尺度および総得点の平均と標準偏差を男女別に求め、平均の差の検定(t検定)を行った結果が表4である。その結果、役割受容尺度においてはいずれの尺度においても有意差が認められなかったが、充実感尺度の「充実感気分」においてのみ、女子の平均が1%水準で有意に高かった。このことからみると、生活の中で感じられる一般的な充実感気分は女子の方が高いのに対して、男子は女子に比較すると、日常生活の中で退屈・空虚感をより強く感じていることが理解される。

表4 役割受容尺度・充実感尺度の平均とSDおよび性差

尺 度	男子 (N=84)	女子 (N=189)
役割受容		
1. 役 割 満 足	14.92 (3.42)	15.70 (3.28)
2. 役 割 評 価	14.87 (3.95)	15.76 (4.11)
3. 役割有能感	12.36 (3.96)	12.31 (4.24)
4. 役 割 達 成	16.51 (3.36)	17.04 (2.94)
総 得 点	58.65 (11.31)	60.81 (11.49)
充 実 感		
1. 充実感気分	14.98 (3.50)	<< 16.43 (4.49)
2. 自立・自信	15.60 (3.86)	15.50 (3.74)
3. 連 帯	15.51 (3.98)	16.42 (4.30)
4. 信 頼	17.04 (3.41)	17.74 (3.07)
総 得 点	63.12 (11.43)	66.10 (12.13)

<<: $p<.01$

(3) 性役割と役割受容の関係

性役割と役割受容との関係を検討するために、性役割の4尺度と役割受容の5尺度との相関をピアソンの相関係数によって算出し、男子の結果を表5-1に、女子の結果を表5-2に示した。

まず、男子では、役割受容尺度の総得点に対して、「女性統合性」および「男性典型性」が1%水準で有意な正の相関を示したほか、「男性統合性」もこれらに比較するとやや低いが、1%水準で有意な正の相関を示した。このうち、「女性統合性」は、役割受容尺度の「役割満足」「役割評価」「役割達成」と最も高い相関を示し、「男性典型性」は「役割有能感」と最も高い相関を示した。この結果からみると、「陽気である」「活動的である」「友好的である」などの項目に代表される「女性統合性」と、「臆病でない」「仕事の手腕がある」「容易に決断を下せる」などに代表される「男性典型性」は、その傾向が強いほど全体的な役割受容が高くなるといえる。しかしながら、「思いやりがある」「誠意がある」「良心的である」などの項目に代表される「男性統合性」では、「役割満足」および「役割評価」との間に1%水準で有意な

表 5-1 性役割と役割受容の関係 (男子, N=84)

性 役 割	役 割 受 容				
	満 足	評 価	有能感	達 成	総得点
1. 男性統合性	.343**	.320**	.173	.190	.332**
2. 男性典型性	.333**	.479**	.630**	.477**	.630**
3. 女性統合性	.447**	.482**	.508**	.558**	.647**
4. 女性典型性	.115	-.057	-.258*	.068	-.055

*: $p < .05$, **: $p < .01$

表 5-2 性役割と役割受容の関係 (女子, N=189)

性 役 割	役 割 受 容				
	満 足	評 価	有能感	達 成	総得点
1. 男性統合性	.281**	.267**	.183*	.211**	.297**
2. 男性典型性	.428**	.348**	.467**	.333**	.504**
3. 女性統合性	.499**	.453**	.407**	.449**	.570**
4. 女性典型性	-.079	-.258**	-.403**	-.095	-.288**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

正の相関が認められただけであった。したがって、男子が役割受容を達成するためには、「男性典型性」や「女性統合性」の獲得が必要であり、とくに有能感や達成感の獲得にはこれらの特性が要求されるといえる。また、「女性典型性」は、「役割有能感」と 1% 水準で有意な負の相関を示していることからみると、男子においては「女性典型性」が高くなるほど、果たすべき役割を遂行する能力への不信や、自信の欠如につながりやすいと考えられる。

一方、女子では、役割受容尺度の総得点に対して、「女性統合性」および「男性典型性」が 1% 水準で有意な正の相関を示し、「男性統合性」もこれらに次いで 1% 水準で有意な正の相関を示した。それとは逆に、「女性典型性」は 1% 水準で有意な負の相関を示した。この結果からみると、女子の場合にも、「女性統合性」および「男性典型性」の獲得が全体的な役割受容をもたらすと考えられる。また、「女性典型性」は、「役割有能感」および「役割評価」と 1% 水準で有意な負の相関を示しており、女子の場合には、「嫉妬深い」「感情的である」「すぐに泣く」などの項目に代表される「女性典型性」が高くなるほど、役割を遂行する能力への不信や、自分の生き方や役割に対する否定的な評価につながりやすいと考えられる。

以上の結果からみると、男女とも共通して、「女性統合性」と「男性典型性」が役割受容を規定する要因であると考えられる。したがって、女子の場合には、「女性統合性」の獲得が、精神的健康の指標である役割受容をもたらすといえる。これに対して、男子では、「男性典型性」が役割受容に最も深く関連しており、「男性統合性」が役割受容を規定する第一義的な要

因であるとは考えられない。したがって、男子の場合には、「統合性」の獲得が精神的健康の指標としての役割受容をもたらすという仮説は支持されないことになる。

(4) 性役割と充実感の関係

性役割と充実感との関係を検討するために、性役割の4尺度と充実感の5尺度との相関をピアソンの相関係数によって算出し、男子の結果を表6-1に、女子の結果を表6-2に示した。

まず、男子では、充実感尺度の総得点に対して、「女性統合性」および「男性典型性」が1%水準で有意な正の相関を示しており、「男性統合性」もこれらに比較するとやや低い、1%水準で有意な正の相関を示した。とくに「女性統合性」は、「充実感気分」「連帯」「信頼」と最も高い相関を示し、「男性典型性」がこれに次いで高い相関を示している。また、「男性典型性」は、「自立・自信」と最も高い正の相関を示しており、精神的な自立や自信、独立の感覚の達成には、「男性典型性」の獲得を必要とすると考えられる。

女子の場合にも、男子と同様に、「女性統合性」「男性典型性」「男性統合性」が、充実感尺度の総得点と1%水準で有意な正の相関を示した。また、「男性典型性」と「自立・自信」との間に最も高い相関が認められたのも、男子の結果と同様であった。しかし、「女性典型性」は、充実感尺度の総得点および「自立・自信」「連帯」と1%水準で有意な負の相関を示している点が男子とは異なり、女子の場合には、「女性典型性」が高いほど充実感は低くなると考えられる。

表6-1 性役割と充実感の関係（男子，N=84）

性 役 割	充 実 感				総得点
	充実感気分	自立・自信	連 帯	信 頼	
1. 男性統合性	.184	.124	.314**	.335**	.308**
2. 男性典型性	.373**	.745**	.401**	.480**	.649**
3. 女性統合性	.485**	.475**	.488**	.601**	.658**
4. 女性典型性	.104	-.105	-.174	.197	-.006

*: $p < .05$, **: $p < .01$

表6-2 性役割と充実感の関係（女子，N=189）

性 役 割	充 実 感				総得点
	充実感気分	自立・自信	連 帯	信 頼	
1. 男性統合性	.320**	.176*	.180*	.296**	.311**
2. 男性典型性	.391**	.650**	.338**	.346**	.552**
3. 女性統合性	.485**	.415**	.457**	.401**	.571**
4. 女性典型性	-.066	-.391**	-.262**	.098	-.213**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

以上の結果からみると、充実感をもたらす要因は、男女とも共通して「女性統合性」と「男性典型性」であると考えられる。したがって、女子の場合には、「女性統合性」の獲得が充実感をもたらすといえるが、男子における「男性統合性」は、充実感を規定する第一義的な要因であるとは考えられない。すなわち、それぞれの性における「統合性」の獲得が、精神的健康の指標としての充実感をもたらすという仮説は、男子については支持されないことになる。

（5）自我同一性地位の決定要因としての「探索」「傾倒」と役割受容の関係

職業、価値、学業の各領域ごとに、「探索」「傾倒」尺度と、役割受容の5尺度との相関をピアソンの相関係数によって算出し、男子の結果を表7-1に、女子の結果を表7-2に示した。

まず、男子では、各領域における「傾倒」が、役割受容尺度の総得点と1%水準で有意な正の相関を示した。とくに価値領域での「傾倒」は最も高い相関を示しており、役割受容の下位尺度のすべてと有意な正の相関を示した。しかし、「探索」についてはほとんど有意な相関が認められず、職業領域において「役割達成」との間に1%水準で有意な正の相関がみられただけであった。

表7-1 「探索」「傾倒」と役割受容の関係（男子、N=84）

同 一 性		役 割 受 容				
		満 足	評 価	有能感	達 成	総得点
職 業	探 索	.056	.125	.092	.365**	.201
	傾 倒	.109	.338**	.326**	.285**	.350**
価 値	探 索	.018	.047	-.041	.205	.068
	傾 倒	.671**	.748**	.636**	.248*	.760**
学 業	探 索	-.062	-.022	.022	.213	.045
	傾 倒	.254*	.248*	-.015	.278*	.241*

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

表7-2 「探索」「傾倒」と役割受容の関係（女子、N=189）

同 一 性		役 割 受 容				
		満 足	評 価	有能感	達 成	総得点
職 業	探 索	.106	.074	.004	.158*	.099
	傾 倒	.274**	.351**	.302**	.148*	.353**
価 値	探 索	-.074	-.210*	-.311**	.002	-.211**
	傾 倒	.736**	.752**	.677**	.215*	.784**
学 業	探 索	.110	-.067	-.204**	.130	-.034
	傾 倒	.209*	.154*	-.007	.120	.143

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

これらの結果からみると、役割受容をもたらす要因は「傾倒」であり、人生における重要な領域にどの程度まで自己投入しているかが、自分の生き方や役割に対する受容を規定すると考えられる。とくに、価値領域における「傾倒」は、役割受容をもたらす大きな要因であるといえる。また、これらの領域における探索や迷いの経験は、必ずしも役割受容を阻害するものではなく、職業に関する探索はむしろ達成感を高めるものと考えられる。

女子の場合には、職業領域および価値領域における「傾倒」が、役割受容尺度の総得点と 1 % 水準で有意な正の相関を示したが、学業領域においては総得点との間に有意な相関が認められなかった。また、価値領域においては、「探索」と役割受容尺度の総得点との間に 1 % 水準で有意な負の相関が認められたほか、下位尺度の「役割評価」および「役割有能感」との間にも有意な負の相関が認められた。さらに、学業領域においても「探索」が「役割有能感」と 1 % 水準で有意な負の相関を示した。

これらの結果からみると、女子の場合にも、価値や職業という重要な領域への自己投入が、自分の生き方や役割に対する受容をもたらすといえる。しかしながら、男子とは異なり、価値領域での探索や迷いの経験は、むしろ役割受容を阻害するものと考えられ、探索や迷いの経験が多いほど、果たすべき役割を遂行する能力への不信や、自己の役割に対する否定的評価につながりやすいと考えられる。

(6) 自我同一性地位の決定要因としての「探索」「傾倒」と充実感の関係

職業、価値、学業の各領域ごとに、「探索」「傾倒」尺度と、充実感の 5 尺度との相関をピアソンの相関係数によって算出し、男子の結果を表 8-1 に、女子の結果を表 8-2 に示した。

まず、男子では、各領域における「傾倒」が、充実感尺度の総得点と 1 % 水準で有意な正の相関を示し、とくに価値領域における「傾倒」は最も高い相関を示した。また、職業領域においては、「探索」が充実感尺度の総得点および「連帯」を除く 3 つの下位尺度と 5 % 水準で有意な正の相関を示している点が特徴的である。

これらの結果からみると、充実感をもたらす要因は、やはり人生における重要な領域に自己投入できていることであると考えられる。とくに、自分の人生や生き方に対して確固たる信念をもち、それに基づいて行動できることが、全体的な充実感をもたらすといえる。また、探索や迷いの経験は、必ずしも充実感を阻害するものではなく、職業や価値に関する探索や迷いの経験は、むしろ自立や自信につながるものであると考えられる。

女子では、男子と同様に、各領域における「傾倒」が、充実感尺度の総得点と 1 % 水準で有意な正の相関を示し、やはり価値領域での「傾倒」は最も相関が高かった。また、職業領域における「探索」は、充実感尺度の総得点と 5 % 水準で有意な正の相関を示し、「自立・自信」との間にも 1 % 水準で有意な正の相関が認められた。さらに、価値領域における「探索」

表 8－1 「探索」「傾倒」と充実感の関係（男子，N=84）

同 一 性		充 実 感				総得点
		充実感気分	自立・自信	連 帯	信 頼	
職 業	探 索	.226*	.273*	-.021	.242*	.226*
	傾 倒	.317**	.380**	.270*	.319**	.414**
価 値	探 索	.146	.259*	-.153	.144	.122
	傾 倒	.525**	.633**	.574**	.574**	.746**
学 業	探 索	.047	.142	-.093	.102	.060
	傾 倒	.382**	.347**	-.052	.362**	.324**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

表 8－2 「探索」「傾倒」と充実感の関係（女子，N=189）

同 一 性		充 実 感				総得点
		充実感気分	自立・自信	連 帯	信 頼	
職 業	探 索	.111	.220**	.065	.131	.165*
	傾 倒	.227**	.433**	.228**	.174*	.342**
価 値	探 索	-.036	.105	-.315**	.026	-.086
	傾 倒	.636**	.593**	.551**	.458**	.729**
学 業	探 索	.109	-.040	-.083	.122	.029
	傾 倒	.225**	.171**	.084	.242**	.227**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

は、充実感尺度の総得点とは有意な相関を示さなかったが、下位尺度の「連帯」との間には、1%水準で有意な負の相関が認められた。

これらの結果からみると、女子の場合にも、価値、職業、学業という人生における重要な領域に対して、信念をもって自己投入できることが充実感をもたらすといえる。また、職業に関する探索や迷いの経験は、自立や自信につながるのに対して、価値に関する探索や迷いの経験は、連帯意識を低下させ、孤立感を強めると考えられる。

（7）自我同一性地位と役割受容および充実感の関係

自我同一性地位の4類型、すなわち「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」の各地位において、役割受容および充実感がどの程度まで獲得されているかを検討した。

自我同一性地位の決定にあたっては、これまでと同様の方法を適用し、男女別に「探索」および「傾倒」尺度の平均値（三川ほか，1989）を基準として、各被検者を4つの自我同一性地位のいずれかに分類した。次に、4つの自我同一性地位間で、役割受容の5尺度および充実感の

5 尺度の分散分析を行い、それぞれの地位における各尺度の平均と標準偏差、および分散分析の結果を、表 9-1、表 9-2 に示した。

まず、男子の結果について検討する。

職業領域では、役割受容尺度の「役割評価」および「役割達成」において、地位間の有意差が認められ、充実感尺度では「充実感気分」および「信頼」で有意差が認められた。それぞれの自我同一性地位ごとに平均を比較すると、役割受容尺度、充実感尺度とも、「達成」地位の平均が最も高く、「早期完了」地位では最も低かった。したがって、職業領域については、「傾倒」だけでは役割受容および充実感にはつながらず、むしろこれらを低下させてしまうと考えられる。すなわち、「傾倒」とともに「探索」があってこそ、自分の役割に対する評価や達成感が生まれ、充実感気分や自己の存在を肯定する信頼感、時間的展望がもたらされるといえる。

価値領域においては、「役割達成」を除くすべての尺度で、地位間の有意差が認められた。各地位ごとに平均をみると、「達成」地位および「早期完了」地位の平均が高いのに対して、「モラトリアム」地位は、充実感尺度の「自立・自信」を除けば、4 つの自我同一性地位の中では最も低い値を示した。したがって、価値領域においては、「傾倒」があるかどうかで役割受容および充実感を規定し、「探索」のみでは役割受容や充実感は阻害されるものと考えられる。すなわち、「モラトリアム」地位のように、自分の生き方や価値観について、探索や迷いを重ねているにもかかわらず、明確な自己投入の対象が見い出せていない場合には、そのような探索や迷いの少ない「拡散」地位よりも、かえって役割受容や充実感が低くなってしまうと考えられる。

学業領域においては、充実感尺度の「信頼」において有意差が認められただけであり、その他の尺度には地位間の差はみられなかった。この「信頼」は、「モラトリアム」地位の平均が最も高く、「拡散」地位では最も低かった。すなわち、自分の専攻に対して迷いや疑問をもち、自己投入できる対象を探索している「モラトリアム」地位は、自己に対する肯定的な信頼感や時間的展望が高いのに対して、そのような動きのみられない「拡散」地位は、自己信頼や時間的展望は低いと考えられる。あるいは、本研究の調査対象が大学生であることを考えると、自己信頼や時間的展望が基盤にあるからこそ、自分の専攻や学科について改めて検討を重ね、新たに自己投入できる方向を探索しているといえるかもしれない。

次に、女子の結果を検討する。

職業領域においては、役割受容尺度および充実感尺度のすべてについて、地位間の有意差が認められた。まず、役割受容尺度に関しては、「達成」地位の「役割達成」が4 つの地位の中では最も高い平均を示したが、その他の尺度では「早期完了」地位の平均が最も高いという結果になった。これに対して、「モラトリアム」地位の「役割有能感」は最も低く、これ以外の尺度では、「拡散」地位の平均が最も低かった。また、充実感尺度については、「達成」地位に

青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (V)

表9-1 自我同一性地位と役割受容および充実感の関係 (男子, N=84)

同一性地位		達成 (N=26)	モラトリアム (N=23)	早期完了 (N=3)	拡散 (N=32)	分散分析 F(3, 80)
職業	役割受容					
	1. 役割満足	15.12 (3.89)	14.74 (3.31)	10.00 (3.74)	15.34 (2.58)	2.372
	2. 役割評価	16.50 (4.39)	13.65 (3.28)	11.67 (1.25)	14.72 (3.62)	3.063*
	3. 役割有能感	13.19 (4.95)	12.00 (3.26)	13.33 (1.25)	11.84 (3.54)	0.671
	4. 役割達成	17.81 (3.46)	17.17 (3.06)	15.00 (0.82)	15.13 (3.04)	3.949*
	総得点	62.62 (13.41)	57.57 (10.52)	50.00 (3.74)	57.03 (9.25)	1.986
領域	充実感					
	1. 充実感気分	16.31 (3.77)	14.48 (3.13)	10.67 (1.70)	14.66 (3.14)	3.214*
	2. 自立・自信	16.88 (4.64)	16.00 (3.48)	14.00 (0.82)	14.41 (3.11)	2.315
	3. 連 帯	16.12 (4.43)	14.30 (4.23)	16.00 (1.63)	15.84 (3.34)	0.980
	4. 信 頼	18.23 (3.66)	17.00 (3.12)	13.00 (2.16)	16.47 (3.03)	2.917*
	総得点	67.54 (13.68)	61.78 (10.10)	53.67 (4.78)	61.38 (9.32)	2.423
同一性地位		達成 (N=12)	モラトリアム (N=29)	早期完了 (N=9)	拡散 (N=27)	分散分析 F(3, 80)
価値	役割受容					
	1. 役割満足	16.92 (2.84)	13.24 (3.53)	16.67 (2.21)	14.48 (2.75)	5.389**
	2. 役割評価	17.58 (3.25)	12.48 (2.74)	17.44 (3.10)	14.15 (3.46)	10.110**
	3. 役割有能感	14.75 (4.44)	10.34 (3.23)	14.89 (4.09)	11.96 (2.73)	6.667**
	4. 役割達成	17.50 (2.10)	16.59 (3.58)	15.00 (4.74)	15.85 (2.56)	1.220
	総得点	66.75 (9.02)	52.66 (9.06)	64.00 (10.68)	56.44 (9.28)	7.681**
領域	充実感					
	1. 充実感気分	17.92 (2.84)	13.69 (3.09)	15.78 (3.15)	14.48 (3.44)	5.085**
	2. 自立・自信	19.42 (2.93)	14.59 (3.64)	16.78 (3.05)	13.78 (2.56)	9.768**
	3. 連 帯	17.83 (3.41)	13.07 (3.34)	18.22 (3.71)	15.52 (3.08)	8.635**
	4. 信 頼	20.17 (2.07)	15.55 (3.46)	17.00 (3.65)	16.59 (2.63)	6.303**
	総得点	75.33 (9.47)	56.90 (9.00)	67.78 (9.73)	60.37 (8.75)	12.485**
同一性地位		達成 (N=38)	モラトリアム (N=10)	早期完了 (N=21)	拡散 (N=15)	分散分析 F(3, 80)
学業	役割受容					
	1. 役割満足	14.97 (3.46)	14.70 (3.20)	15.86 (3.37)	13.60 (3.05)	1.288
	2. 役割評価	15.08 (4.14)	13.90 (4.06)	16.10 (3.75)	13.27 (2.74)	1.764
	3. 役割有能感	12.45 (4.17)	12.10 (2.55)	12.29 (4.65)	12.40 (3.05)	0.022
	4. 役割達成	16.82 (3.07)	17.70 (2.33)	16.86 (3.51)	14.47 (3.59)	2.558
	総得点	59.32 (11.48)	58.40 (9.45)	61.10 (13.03)	53.73 (7.16)	1.318
領域	充実感					
	1. 充実感気分	15.42 (3.56)	13.90 (3.70)	15.90 (3.05)	13.27 (3.00)	2.278
	2. 自立・自信	16.34 (3.96)	14.40 (3.23)	16.14 (4.32)	13.73 (2.08)	2.162
	3. 連 帯	14.87 (3.97)	16.50 (3.23)	16.33 (4.80)	15.33 (2.65)	0.828
	4. 信 頼	17.18 (3.34)	18.20 (3.34)	17.86 (3.03)	14.73 (3.07)	3.317*
	総得点	63.82 (11.77)	63.00 (10.79)	66.24 (11.78)	57.07 (7.55)	2.018

*: $p < .05$, **: $p < .01$

表 9-2 自我同一性地位と役割受容および充実感の関係 (女子, N=189)

同一性地位		達 成 (N=74)	モラトリアム (N=46)	早期完了 (N=21)	拡 散 (N=48)	分散分析 F(3, 185)
職 業	役割受容					
	1. 役 割 満 足	16.28 (3.17)	15.28 (3.02)	16.90 (3.75)	14.69 (3.11)	3.618*
	2. 役 割 評 価	16.53 (3.99)	15.00 (3.78)	18.52 (3.85)	14.10 (3.78)	7.879**
	3. 役割有能感	13.32 (4.03)	10.80 (3.92)	14.62 (4.42)	11.19 (3.88)	7.144**
	4. 役 割 達 成	17.76 (2.95)	16.85 (2.68)	17.43 (2.94)	15.94 (2.79)	4.081**
	総 得 点	63.89 (11.37)	57.93 (9.90)	67.48 (11.37)	55.92 (10.21)	8.951**
領 域	充 実 感					
	1. 充実感気分	17.12 (4.26)	16.37 (4.63)	17.52 (4.45)	14.94 (4.32)	2.839*
	2. 自立・自信	16.78 (3.24)	14.78 (4.01)	16.90 (3.48)	13.60 (3.26)	9.736**
	3. 連 帯	17.07 (4.18)	16.04 (3.92)	18.48 (4.56)	14.90 (4.13)	4.503**
	4. 信 頼	18.43 (2.80)	17.54 (3.24)	18.05 (3.21)	16.73 (2.94)	3.216*
	総 得 点	69.41 (11.63)	64.74 (10.99)	70.95 (12.12)	60.17 (11.26)	7.672**
同一性地位		達 成 (N=57)	モラトリアム (N=60)	早期完了 (N=38)	拡 散 (N=34)	分散分析 F(3, 185)
価 値	役割受容					
	1. 役 割 満 足	17.49 (2.72)	13.77 (2.74)	17.97 (2.06)	13.59 (2.70)	36.322**
	2. 役 割 評 価	17.88 (3.21)	12.65 (3.33)	18.95 (2.95)	14.15 (2.98)	42.845**
	3. 役割有能感	14.25 (3.50)	8.68 (2.44)	15.63 (3.90)	11.76 (3.13)	44.908**
	4. 役 割 達 成	17.46 (2.94)	16.65 (3.22)	17.66 (2.30)	16.32 (2.78)	1.988
	総 得 点	67.07 (9.74)	51.75 (8.09)	70.21 (7.57)	55.82 (7.84)	51.502**
領 域	充 実 感					
	1. 充実感気分	18.98 (3.29)	14.13 (4.09)	18.92 (3.53)	13.41 (3.76)	29.539**
	2. 自立・自信	17.74 (2.99)	13.90 (4.05)	16.32 (2.86)	13.68 (2.74)	17.277**
	3. 連 帯	17.98 (3.65)	13.68 (4.02)	19.39 (3.06)	15.32 (3.61)	23.549**
	4. 信 頼	19.11 (3.06)	16.77 (2.74)	18.55 (2.86)	16.26 (2.56)	10.649**
	総 得 点	73.81 (9.23)	58.48 (10.26)	73.18 (8.72)	58.68 (9.56)	38.240**
同一性地位		達 成 (N=97)	モラトリアム (N=25)	早期完了 (N=34)	拡 散 (N=33)	分散分析 F(3, 185)
学 業	役割受容					
	1. 役 割 満 足	16.26 (2.97)	14.56 (3.19)	16.29 (2.99)	14.33 (3.85)	4.421**
	2. 役 割 評 価	15.73 (4.05)	14.96 (3.01)	17.65 (4.12)	14.52 (4.31)	3.861*
	3. 役割有能感	12.03 (4.14)	11.36 (3.54)	13.82 (4.56)	12.30 (4.30)	2.024
	4. 役 割 達 成	17.51 (3.01)	16.76 (2.42)	16.71 (3.16)	16.21 (2.56)	1.924
	総 得 点	61.53 (11.33)	57.64 (8.98)	64.47 (11.92)	57.36 (11.70)	2.971*
領 域	充 実 感					
	1. 充実感気分	16.88 (4.19)	15.84 (3.99)	18.12 (3.64)	13.82 (5.24)	6.241**
	2. 自立・自信	15.91 (3.85)	14.00 (2.93)	16.18 (3.69)	14.76 (3.54)	2.585
	3. 連 帯	16.22 (4.43)	16.08 (3.62)	18.29 (3.69)	15.36 (4.40)	3.019*
	4. 信 頼	18.25 (2.92)	17.00 (2.37)	17.79 (2.83)	16.76 (3.77)	2.547
	総 得 点	67.25 (11.88)	62.92 (9.86)	70.38 (10.10)	60.70 (13.78)	4.693**

*: $p < .05$, **: $p < .01$

おける「信頼」が最も高い平均を示したが、これ以外の尺度では、「早期完了」地位の平均が最も高いのに対して、「拡散」地位の平均はいずれの尺度においても最も低かった。したがって、女子の場合には、職業領域において「傾倒」があることが、役割受容や充実感をもたらすと考えられ、「探索」は役割受容や充実感に影響しないといえる。すなわち、女子の場合には、職業に関しては、特定の方向に早くから自己投入したまま、迷いや探索を経験しないという「早期完了」タイプのあり方が、最も安定した役割受容や充実感につながると考えられる。

価値領域では、役割受容尺度の「役割達成」を除くすべての尺度で、地位間の有意差が認められた。まず、役割受容尺度については、いずれの尺度においても、「早期完了」地位の平均が最も高いのに対して、「役割満足」では「拡散」地位の平均が最も低く、「役割評価」「役割有能感」および総得点では、「モラトリアム」地位の平均が最も低かった。この結果からみると、自分の生き方や価値観に対して迷いや探索を経験しないまま、自己投入の方向を決定している「早期完了」タイプのあり方が、最も高い役割受容を獲得していると考えられる。しかし、傾倒すべき生き方が見当たらず、現在その方向を探索しつつある「モラトリアム」タイプは、自己の役割に対する否定的な評価や、役割を遂行する能力への不信感もちやすいといえる。また、充実感尺度については、「連帯」において「早期完了」地位の平均が最も高かったが、その他の尺度では「達成」地位が最も高い平均を示した。これに対して、「モラトリアム」地位では、「連帯」および総得点で最も低い平均を示し、「拡散」地位の「充実感気分」「自立・自信」「信頼」は、4つの地位の中で最も低かった。したがって、価値領域においては、自分の生き方に対して迷いや探索を経験したうえで、自己投入できる方向を見出した場合に、最も安定した充実感が獲得されと考えられる。また、他者との連帯意識に関しては、「早期完了」が最も高いのに対して、迷いや探索を経験しつつある「モラトリアム」は、孤立感をもっていることが理解される。

学業領域では、役割受容尺度の「役割満足」「役割評価」および総得点で、4つの地位間に有意差が認められ、いずれも「早期完了」地位の平均が最も高く、「拡散」地位の平均は最も低かった。また、充実感尺度については、「充実感気分」「連帯」および総得点で、地位間の有意差が認められ、「早期完了」地位の平均が最も高く、「拡散」地位の平均は最も低かった。したがって、学業領域においては、「探索」の程度にはかわりなく、現在の専攻に自己投入しているほど役割受容や充実感が高いのに対して、迷いや探索を経験することなく現在の専攻を選択し、その方向に自己投入できないている場合には、役割受容および充実感が最も低くなることが理解される。

結 論

本研究では、精神的健康を表す指標として役割受容と充実感を取り上げ、性役割および自我同一性地位との関連を検討した。

まず、性役割との関連では、男女ともに「女性統合性」と「男性典型性」が、役割受容および充実感に最も深く関連することが示された。また、それぞれの性における「統合性」は、「典型性」よりも成熟したあり方であり、精神的な健康を示すという仮説については、女子ではこれを支持する結果が認められた。しかし、男子の場合には、「男性統合性」よりもむしろ「男性典型性」が、役割受容および充実感を規定していることが示され、役割受容および充実感を精神的健康の指標とするならば、男子における「統合性」が「典型性」よりも成熟したあり方であるとはいえないという結果となった。

これは、今回の調査対象が大学生であるため、女子における性役割形成がすでに「統合性」獲得の段階にまで達しているのに対して、男子ではまだ性役割形成の途上にあり、「統合性」よりも「典型性」の獲得がなされている段階にあるからではないかと考えられる。青年期には、親からの自立、価値観の確立、職業の選択などの発達課題が、性別にかかわらず共通してみられるが、これらの課題を達成するためには、いわゆる伝統的な男性性に属する自主性、積極性、能動性などの特性が必要とされる。女子の場合には、このような発達課題に取り組むことにより、いわば外的要因の要請に応じる形で、「女性統合性」が速やかに獲得されていくものと考えられる。これに対して、男子の場合には、発達課題の達成にはなお一層の「男性典型性」が要求されることになり、「男性統合性」が獲得されるのは、発達のみると、女子よりもかなり遅い時期になるのではないかと考えられる。この問題は、成人期の被検者を対象とすることによって検討する必要があるだろう。

自我同一性地位と役割受容および充実感との関連は、男女でやや異なる結果となった。男子の場合には、探索あるいは危機を経験した後に自己投入できる対象を見出した「達成」地位が、役割受容、充実感ともに高かった。これに対して、女子では探索あるいは危機の経験は、むしろ役割受容や充実感を阻害することが示され、大きな迷いや探索を経験することなく自己投入の方向を決定している「早期完了」地位において、全体的に役割受容および充実感が高かった。したがって、「達成」地位を最も成熟した精神的に健康なタイプであるとする仮説は、男子においては支持されうるが、女子では支持されないという結果となった。

これは、自我同一性地位に関する理論的モデルやその実証的研究の多くが、男子を対象にしたものであるため、「達成」地位を最も成熟した精神的に健康なあり方であるとする仮説を、女子にそのまま適用するには無理があるのではないかと考えられる。役割受容および充実感と

の関係で見ると、女子にとっての「早期完了」地位は、精神的に健康なあり方として肯定的に評価できるように思われる。

以上の結論から考えると、青年期における人格形成のあり方や精神的健康を理解する視点は、性別による発達の違いを踏まえた上で設定する必要があるといえる。これらの問題を、性別による発達を考慮しない理論モデルで説明しようとする、それぞれの性に固有の特徴や、異なるプロセスをもつ発達のあり方を見落とすことにもなりかねない。

なお、本研究では、操作的定義の必要性から、役割受容尺度および充実感尺度の得点が高いほど、精神的健康を示すものと仮定した。しかしながら、役割受容および充実感が高いほど精神的に健康であるとする前提は検討する余地があり、過度に偏らない適度な役割受容あるいは充実感が精神的健康につながるのではないかという点についても、議論する意義があると思われる。

また、精神的健康の指標となる特性は、本研究で用いた役割受容や充実感以外にも考えることができよう。これらの点は、今後の課題として検討していきたい。

引用文献

- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹（1991） 青年期の性役割形成とその関連要因に関する研究（Ⅳ） 日本教育心理学会第33回総会発表論文集，501-502.
- 三川俊樹（1988） 成人期における役割受容 追手門学院大学文学部紀要，22，1-22.
- 三川俊樹（1990） ライフ・キャリアの視点からみた役割受容 進路指導研究，11，10-17.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹（1989） 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅱ）——自我同一性地位および性役割の測定—— 追手門学院大学文学部紀要，23，19-36.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹（1990） 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅲ）——性役割および自我同一性地位と価値観の関連—— 追手門学院大学文学部紀要，24，23-37.
- 西平直喜（1973） 青年心理学 共立出版
- 大野 久（1984） 現代青年の充実感に関する一研究——現代日本青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究，32，100-109.

〈付 記〉

本研究の一部は、日本教育心理学会第33回総会において発表した（井上・三川・芳田，1991）が、本研究をまとめるにあたり若干のデータを加えて再分析を行った。

〈付表1〉 役割受容尺度（短縮版）の項目

・：逆転項目

1. 役割満足

- 1. 私は、今の自分の役割に満足している方である
- 5. 私は、自分の役割にあった生き方をしていると思う
- 9. 私は、自分の能力を十分に生かしていると思う
- 13. 私は、自分らしい生き方をしていると思う
- 17. 私は、今の生活に、生きがいを感じている

2. 役割評価

- *2. 私は、つまらない生き方をしていると思う
- *6. 私は、自分の生き方が、何かまちがっているような気がする
- *10. 私は、やりたくないことばかりさせられているような気がする
- *14. 私は、多くの時間をムダにしているような気がする
- *18. 私は、自分が何をやるべきなのか、よくわからない

3. 役割有能感

- *3. 私は、自分のやるべきことを、思うようにこなせないことがある
- *7. 私は、自分のしていることにあまり自信がもてない方である
- *11. 私は、自分の能力に、あまり自信がもてない方である
- *15. 私は、ひょっとすると失敗するのではないかと、不安になることがある
- *19. 私は、何をしてよいのかわからずに、困ってしまうことがある

4. 役割達成

- 4. 私は、やるべきことは、きちんとやりとげる自信がある
- 8. 私は、もっと他のことをやってみたいと思う
- 12. 私は、自分に与えられたことを、積極的にこなしていける方である
- *16. 私は、責任のあることは、なるべくやりたくない方である
- 20. 私は、家族やまわりの人から、何かを期待されていると思う

〈付表2〉 充実感尺度（短縮版）の項目

・：逆転項目

1. 充実感気分 — 退屈・空虚感

- *21. 毎日毎日、変化のない単調な日々でつまらない
- 25. 生活に充実感に満ちた楽しさがある
- 29. 私は、生きがいのある生活をしている
- 33. 毎日の生活にはりがある
- *37. 毎日の生活に退屈している

2. 自立・自信 — 甘え・自信のなさ

- 22. 私は、精神的に自立していると思う
- 26. 私は、主体的に生きていると思う
- 30. 私は、独立心が強いと思う
- *34. いざとなると、どうしても人を頼ってしまう
- 38. 自分の信念にもとづいて生きている

3. 連帯 — 孤立

- *23. だれも私を相手にしてくれないような気がする
- *27. 私ひとりがとり残されているようで寂しい
- *31. 自分がなさけなくいやになる
- *35. 私をわかってくれる人がいないと思う
- *39. 自分の理想とかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる

4. 信頼（時間的展望） — 不信（時間的展望の拡散）

- 24. 自分の責任をはたすことに喜びを感じる
- 28. 生まれてきてよかったと思う
- 32. 毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある
- 36. 毎日の生活の中でなにかへの使命感がある
- 40. 私は、価値のある生活をしていると思う